

## 大韓赤十字社の日本訪問

2017年6月2～5日の日程で大韓赤十字社(韓赤)訪問団が日本を訪れ、日本赤十字社(日赤)が受け入れました。訪日の目的は、韓国国内における原子力災害発生の可能性を見据え、日赤が整備した原子力災害対策・対応システムを視察することです。訪問団は、日赤本社並びに福島県と宮城県の各所を訪れ、特に石巻赤十字病院では日赤が開催している「原子力災害対応基礎研修会」の一部に参加しました。過密スケジュールの中、団員は日赤のスタッフとさまざまな意見交換を行い、互いにプレゼンテーションを行い、東日本大震災被災地各所を視察しました。日赤にとっては、韓赤の訪問団のメンバーをお迎えし、日本赤十字が東日本大震災及び福島原発事故を経て学んだ教訓から築き上げた対策やシステムを紹介する名誉ある機会となりました。日赤は、姉妹社並びに赤十字国際委員会及び国際赤十字・赤新月社連盟における原子力災害対策整備を支援するため、今後もこうした協力活動を続けていきたいと考えています。

訪問団員が帰国後に作成した報告書をもとに、会議で発表された資料や訪問中の写真を交え、韓赤の日本訪問記を紹介します。

### 日赤を訪れ、韓赤は東日本大震災による壊滅的被害の実情を把握

#### —将来の原子力災害に備え、韓赤の役割について考察を深める

2017年6月2～5日、韓赤訪問団は、日赤本社、日赤福島県支部及び東日本大地震で最も深刻な被害を受けた地域の一つである福島・宮城両県の被災地を訪れました。2011年3月11日に発生したマグニチュード9.0の巨大地震では多くの方が犠牲となり、主要インフラや農・漁業に壊滅的被害がもたらされました。

韓赤による今回の訪日は、「2015年東アジア諸国赤十字社リーダー会議」で採択された、災害対策のための地域協力体制強化を呼びかける行動計画、「アジェンダ3」の実践であるとともに、両国間の連携を推進する目的で実施されました。また、この訪問は、日赤が整備した実用的で体系的な救護活動の内容やシステム及び赤十字原子力災害情報センターの役割を学ぶ機会でもありました。それにより、韓赤の職員及び災害救護エージェントの実践的災害対応能力の強化・育成を図ることにつながります。

2016年、朝鮮半島南部の都市慶州が四半世紀ぶりという大規模地震に見舞われ、そうした背景から、地震が原子力災害を引き起こした日本における今回の事例は、大地震に起因する原子力事故として韓国国民にとっても今では身近な話題となっています。

韓赤の災害安全部本部長、Kim Yong-Sang氏が率いる訪問団のメンバーは、韓赤本社及び原子力発電所付近に位置する支部から参加した職員9名です。

## 第1日目 (6月2日): 日赤本社

訪問団が最初に訪れたのは日赤の本社でした。赤十字原子力災害情報センター長、山澤将人氏がプレゼンテーションを行い、同センターの役割及び日赤による救護活動に関する法体系を説明しました。

日赤の救護体制について韓赤が最も強い印象を受けたのは、日赤の災害対応活動の中心が、13カ所の緊急被ばく医療指定機関を含む全国92カ所の赤十字病院に所属する職員であるという事実でした。このことは、原子力・放射線災害への対応活動が国立緊急被ばく医療センターによって統括され、必要とされる支援ごとに同センターが個別の病院を指定するという韓国の仕組みとは大きく異なります。

また山澤センター長は、熊本地震を例に、日赤の医療救護体制を説明しました。2016年4月16日に熊本地方で発生した熊本地震では、医療救護班207個班・要員1,600名が動員されました。山澤センター長は、熊本での救護活動によって、災害対応における赤十字ボランティア活動を強化する必要性を認識したことを説明しました。

センター長のプレゼンテーションに続いて質疑応答が行われ、韓赤からは、災害や大事故が発生した際に日赤と日本政府が救援物資の供給をどのように調整しているのか、また、両組織間で職務分掌及び職務内容をどのように定義しているのかについて質問がありました。

続いて赤十字原子力災害情報センターの藤巻三洋氏が、日赤が構築した原子力災害対策・対応の仕組みを説明しました。藤巻職員によれば日赤は、東日本大震災の救護活動が完全に終了するまで、原子力災害対策・対応能力向上のための施策づくりには十分に着手できなかったということでした。そのため、原子力災害という事象の特殊性ゆえに、震災直後には救護班を効率的に派遣することができなかったといいます。



日赤本社での会議

藤巻職員は特に、この救護活動において日赤の救護要員たちの前に立ちだかったのは、防護服の不足、そして原子力災害に際しての救護対応に関するガイドラインの欠如だったことを指摘しました。このため、日赤はその後、放射線防護用資機材・防護服を備蓄し、救護要員に対しては基礎研修を実施する等の対策を講じました。

この日最後の発表は、内閣府の原子力防災担当政策統括官、林田浩一参事官補佐によるプレゼンテーションでした。林田氏は日本政府における災害対策システムの構造及びプロセス全体を管理する立場にあります。

東日本大震災を経て、災害対策に関する政府の施策がどのように変更されたのかについて説明がありました。日本政府は、東日本大震災で十分に機能しなかった原子力災害発生時の対応計画の見直しを行い、2012年に「原子力災害対策指針」を制定しました。

この会議で発表された2つのプレゼンテーションの資料が、以下のリンクからダウンロードできます。

山澤センター長の発表: [日本赤十字社の災害救護活動](#)

藤巻職員の発表: [原子力災害に対する日本赤十字社の取り組み](#)

## 第2日目 (6月3日): 福島県

来日2日目、一行は福島県内の数カ所を視察し、また、日赤福島県支部と韓赤釜山支部がそれぞれプレゼンテーションを行いました。

### コミュタン福島訪問

最初の訪問地に選ばれたのは、福島県環境創造センター内にある「コミュタン福島」でした。この施設は、福島原発事故に関する情報の保全と展示を目的に設立され、内部は5つのセクションに分かれてそれぞれのテーマに基づき、2011年3月11日大震災後の被災地復興プロセス、環境回復の取り組み、放射線に関する基本的な情報、代替エネルギー、原子力に依存しない生活など、さまざまな情報を展示しています。

訪問団員たちはこうした展示物を見て、地域の人々が震災で負った痛手をくぐり抜け、元の生活を取り戻すためにいかに努力を傾けているかを理解することができました。



福島県三春町のコミュタン福島

### 福島県支部との意見交換

コミュタン福島の見学を終えた後で、東日本大震災の救護活動における救護班の体験を伝えるため、日赤福島県支部スタッフがプレゼンテーションを行いました。

福島県支部の総務課長兼組織推進課長である岸波庄一氏が説明を行い、救護要員の安全を確保するために救護チームが経験した苦難や試行錯誤したことを報告しました。救護班を派遣した際、放射線下の活動に必要な放射線防護服や線量計の用意がなかったことから、被ばくを回避するために救護要員たちを被災地から撤退させざるを得なかったからです。



日赤福島県支部職員の説明



救護要員へのスクリーニング



日赤福島県支部の健康増進事業

次に福島県支部統括参事、高野浩二氏から、福島県支部が被災者のために行っている復興支援活動が紹介されました。それらには健康増進事業、生活再建事業、避難している子供たちへの教育支援、避難地域住民交流会などがあります。

続いて、釜山市役所が関連団体と連携して年に1回実施している総合防災訓練について、韓赤釜山支部が説明を行いました。

この会議で発表されたプレゼンテーション資料は、以下のリンクからダウンロードできます。

岸波課長の発表：[東日本大震災における原子力災害対応](#)

高野参事の発表：[東日本大震災における日本赤十字社福島県支部の復興支援事業](#)

Jung Hwa Yong氏の発表：[釜山の放射線・原子力災害対応](#) (英語版のみ)

## 福島県被災地視察

見学を終えた一行は、福島第一原子力発電所に隣接する帰還困難区域に向かいました。日赤福島県支部職員の説明を受けながら、住民の安全確保のため今も立ち入りや滞在が禁止されている地域を視察しました。荒れ果てた家屋や放置された車の姿が被害の深刻さを物語っていました。



東日本大震災による損壊(福島県)



立ち入り禁止区域(福島県)

市町村によっては、避難指示が解除されたにもかかわらず、総人口の1割にも満たない住民しか帰還していないそうです。車を走らせていると、除染作業を実施している光景を目にしました。放射性物質を取り除く取り組みは、線量レベルが安全基準を満たすまで続けなければなりません。

視察の最中にも質疑応答が行われ、関心は原子力損害賠償制度及び汚染土壌の廃棄に集中しました。



制限区域(福島県)



除染で生じた廃棄物(福島県)

### 第3日目 (6月4日): 石巻及び女川

来日3日目、訪問団は、日赤が医療救護班要員を対象に石巻赤十字病院で開催した「原子力災害対応基礎研修会」の一部に参加し、その後女川地域医療センターを訪れました。

#### 日赤原子力災害対応基礎研修会

訪問団メンバーが参加したセッションでは、個人線量計の使用方法和防護服の着脱方法並びにサーベイメータと個人被ばく線量計の保守方法を学びました。

このセッションでは、防護服の着脱方法が研修者たちに実演で示されました。このセッションは団員にとって、自分で防護服を身に着け、線量測定装置を使う機会となり、そのような装備の使用方法について理解を深めることができました。

団員はケーススタディにも参加しました。研修者を6～8名のグループに分け、各組に2～3名の緊急被ばく医療アドバイザーが割り当てられ、シミュレーション方式のケーススタディを指導します。

研修を修了した記念に、コース終了時には参加証が贈られました。



参加証授与

## 女川地域医療センター

研修を終えた訪問団は、女川地域医療センター内に併設されている東日本大震災災害資料館に向かいました。この資料館は、2011年3月11日津波襲来時の女川町の様子を伝える写真や報道資料を展示しています。

医療センターの建物の柱に残る浸水の爪痕は、津波が建物内部にまで達する高さだったことを物語っています。センターは女川町を見下ろす丘に位置しているため、ふもとの町で営まれていた人々の生活や経済活動が津波に飲み込まれてしまったことを示しています。医療センターを下った道沿いには、祭壇や吊いの石が置かれていました。



## 女川原子力発電所

訪問団は次に、東北電力が保有する女川原子力発電所(女川原発)に隣接する女川原子力PRセンターに移動しました。

女川原発が福島第一原子力発電所よりも3月11日の地震の震源に近い位置に建っていることは驚きでした。高い標高に立地している女川原発は、福島第一原発を襲った壊滅的な被害を免れたのです。それはとりもなおさず、地震と津波の危険性について熟慮を重ね、発電所を高い位置に建設し、一般には十分とされていた以上の高さの防潮堤で建屋を防護した結果でした。

PRセンターのガイドの説明によれば、東北電力は、外部電源完全喪失の際も炉心損傷を防止する改良型電力システムによって、女川原発の緊急対応能力をさらに強化する取り組みを進めているということでした。



## 第4日目 (6月5日): 東京

訪問団が4日目に訪れたのは、東京消防庁が運営している池袋防災館でした。インタラクティブな学びの場として同施設は地震、火災、煙などさまざまな緊急事態を想定した体験ツアーを提供し、防災と救命について知ることができるようになっています。



ツアーでは5つの違う種類の地震を体験することができ、揺れのタイプに従った避難行動が学べます。団員たちは消火器の操作や濃い煙中の避難も体験しました。また、負傷者への救命措置及びマウスツーマウス蘇生法を練習できたのは有意義な経験でした。

## 日本訪問を終えて

韓赤による今回の日本訪問は、人類史上4番目という規模の地震が招いた破壊の爪痕をたどる旅であり、また、日韓の赤十字社が災害に対する備えと対応を強化するために実施している施策と業務システムを互いに学び合う機会でもありました。

こうした研修を重ねることで、異なる地域の赤十字社間で体験・知見を共有する基盤がやがて構築され、ついには地球規模の災害に立ち向かうための、さらに進んだ一貫した包括的対応システムが実現するはずであるという訪問団の信念は、この訪日体験によって強まりました。

訪問を終えた団員たちが旅行中に抱いた個人の考えやアイデアの一部を以下にまとめました。

### **韓国は日本の経験を生かして災害対策に取り組みたい**

- 「日赤で機能している災害対応計画や装備を学べたのは大きな収穫だった。」
- 「日本政府の方と日赤が行ったプレゼンテーションを見て、赤十字と国を結びつけているよく整備された災害対応システムを学ぶことができ役に立ったし、また、日赤が高い信頼を得ている理由も納得できた。」
- 「日赤の原子力災害対応システムは、92カ所の赤十字病院を基礎に成り立っていて、韓赤の状況と全く違うと感じた。従って、放射線災害に対処する我々自身の対応システムを確立するには、別のアプローチを考える必要があると思う。」

### **長い時間と懸命な努力がなされ、不安は残るも復興活動は続く**

- 「日本での原子力災害について自分が抱いていた以前の認識は、インターネット、ラジオ、SNSなどを通じて得られた間接的な情報に基づいていた。しかし、今回の訪問で、もっと客観的観点から事実を見る機会が得られた。また、日赤において救護の現場で活動する人たちと直接交流する時間を持てた。」
- 「この訪問前は、放射線が怖くて福島を訪れることには抵抗があり、不安も感じた。しかし、訪問中ずっと、行く所どこにでも放射線測定器が設置されていたので、安心感を覚え、安全と感じた。」
- 「復興に向けて長い時間と大きな努力を傾けているにもかかわらず、除染作業が完了する目途はた

っていないように見えた。また除染作業で出た放射線廃棄物の処理が課題になっているようだ。」

- 「汚染された地域を移動中、除染作業の見学は車の窓越しにしか許されなかったのであまり情報を集められなかった。しかし訪問者の安全に配慮しての対策なので、それも十分理解できた。」

**災害からの復興を目指す日赤のさまざまな努力は、被災者に大きな励ましとなり、元気を与えている**

- 「災害復興事業を含め、日赤が行っている多岐にわたる活動は、日本の人々に大きな癒しを与えている」

- 「今回の訪問で、韓赤のホープシェアリング・ボランティアセンターで特別プロジェクトとして採用できる活動のヒントが得られた。」

- 「韓国における現在の救護活動は、救援物資の配布に著しく偏っている。我々は、支援グループと地方自治体の認識を変える必要がある。」

- 「訪問団を受け入れて下さった日赤に感謝する。災害に立ち向かい、多くの問題に対処するためには、今回の訪問が両組織間における強い連帯感の育成に資すると思う。個人的な面では、この体験は自分の能力を向上させ、幅を広げるために役立つと思う。」